



日本ドッジビー協会

沿 革

< 2008年（平成20年） >

●日本ドッチビー協会の設立構想

それまでドッチビーの普及は日本フライングディスク協会（JFDA）が担っていたが、国内においてドッチビーは急速に普及したため、指導者や審判員の育成といった選手層以外へ向けた対応が追いついていないことは否定できない状況にあった。

これらはドッチビー専門組織による通年活動が不可欠で早かれ、遅かれ必要になることを前提に国内での本格普及の体制確立を目的として2008年初頭、JFDAドッチビー担当理事が中心となり、日本ドッチビー協会（DBJA）の設立を決定。設立目標を同年、秋として準備を開始した。

●設立以前



日本フライングディスク協会主催により2005年にはじまったナゴヤドームにおける夏休み期間中の全国大会は、国内のドッチビー普及において重要な役割を果たしたが、年を追うごとに参加者の減少傾向が続き、2008年9月21日（日曜日）に行われた第4回大会は初の試みとなる夏休み期間以外、秋期開催となったことでさらに、減少に拍車がかかる結果となった。また、ドーム球場を使用することの費用について、企業協賛に大きく依存していたが企業環境の厳しさもあり、大きく想定を割り込むこととなった。結果としてナゴヤドーム以外に場所を移すことなく4回開催をもって全国大会は終了することとなった。しかし、その内容は可能性が見える意味深い大会であった。

2年連続2回目となる台湾チームが小学生高学年部門に参加したが台湾国内で予選大会をおこない、そこで優勝したチームが代表として遠征してきたとのことでそのプレイ内容は、国内チームではなかなか見られない変化スローを殆んど使用しないスタイルで、かなりの研究と練習を積んできたことを鮮明に見ることができ、同部門優勝を飾る結果を残した。



この大会は日本ドッチビー協会設立準備期間のためJFDA主催、DBJA主管としておこなわれ、初の試みであるドッチディスタンスの公式大会が日本ドッチビー協会主催によっておこなわれた。日本記録を公認する初の場となり、日本最長記録は33・98メートルと認定された。この記録大会が実質的にドッチビー新体制であるDBJAとして主催する初イベントとなり、9・21は新旧体制がクロスした節目となる1日として後々に記憶されるだろう。

●日本ドッチビー協会設立

4～9月を準備期間として2010年10月1日、東京都千代田区に日本ドッチビー協会（DBJA）が設立。

< 2009年（平成21年） >

●国内の活動

2008年、秋の日本ドッジビー協会設立後の基本方針により「地域における大会への協力・支援」を活動の中心軸にするとされ、協会の具体的活動は地域大会のきっかけづくりとなる一般向けの体験型講習会や大会開催スタッフに向けた審判講習などの積極的実施に特化した。

しかし、協会設立時の中心メンバーが東京近郊に寄っているため、これらの動きはどうしても東京を中心とした関東圏に偏ってしまう問題もあった。

全国的に一律におこなえる協力・支援の必要性を感じ、その具体策として認定大会制度を発足させた。

これは全国どこでおこなわれる大会であっても基本的に認め、参加者各個人へ配布いただくことを目的に大会参加人数分のドッジビーデザインのグッズを数量制限することなく大会主催者へ無償プレゼントするサービスを開始。だが初期のころは、告知が行き届かず半期で5件程度の申請であった。

諸事情により遅れていた協会公式ホームページ www.dbja.jp が7月にやっと開設となった。

それに伴って認定大会の申請も急速に伸びてHP開設後半期で約20件の申請があり、無償という点が支持されたのか、かなり認知が上がり今後も順調に増えると思われる。

The logo for the website www.dbja.jp, featuring the text in white on an orange rectangular background.

●ルール改定

2009年10月、ドッジディスタンスの改訂ルールが発表された。引き続き、11月にゴールドドッジ、12月にはディスクドッジもそれぞれ改訂ルールが発表となった。ディスクドッジにおける違反スローについて大きな変更があり、小学生はバックハンドおよびフォアハンドの基礎スローのみとすることとなった。ただし、地域大会は主催者ローカルルールでおこなうことを推奨しており、この改訂ルールが厳密に適用されるような広域自由参加の大型大会が現在のところ、存在しないがために大きな混乱もなく、ルールに関する問い合わせも特に増えるようなことはなかった。



●海外の動向

2009年3月、世界ドッジビー連盟（Federation of International Dodgebee Associations）略称FIDAの設立準備室が米国に設置された。との情報があった。

8560 Oakwood Place Rancho Cucamonga, CA. 91730 Hero Disc USA内 担当：Sam Ferrans

Tel: 909-260-3208 Fax 909-481-6263 www.dodgebee.com

< 2010～11年（平成22～23年） >

●国体デモンストレーションとしてのスポーツ行事（通称デモスポ）にドッジビー採用

2010年最大のニュースは2013年東京国体デモスポ行事にドッジビーが2区市で採用決定したことだろう。

交渉自体は2009年前半より開始していたが、本決定がなされ初の関係者が一同に会する会議が

2010年6月2日（水曜日）10：30より千代田区役所の会議室で行われた。出席者は（役職はすべて当時）

千代田区 区民生活部 文化スポーツ課

課長 佐々木 勝広氏／スポーツ振興係長 柴崎 仁氏／同 主事 田辺 隆氏

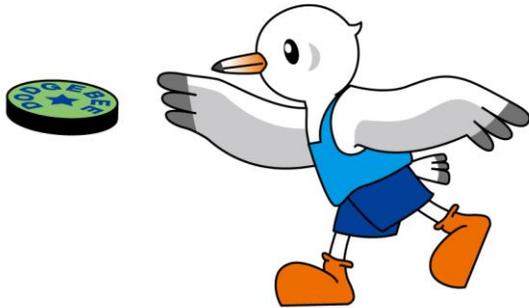
調布市 生活文化スポーツ部 国体推進室

室長 源後 哲郎氏／国体推進係主任 菊地 英一氏／同 主事 小林 幸平氏

そして日本ドッジビー協会 代表 稲垣 敬雄／同 副代表 林 昌永の8名との記録が残っている。

また、先催である2012年岐阜国体においても多治見市でのドッジビー採用が決定していた時期でもあり、

2年連続および2区市採用とドッジビーの将来性を感じさせる大きなトピックスと言え、これ以降、国体デモスポ準備として指導・審判員資格試験を、東京都を中心に試験的实施を開始するなど総合的な普及活動が活発化した。



●新規ディスク登場！

また製品としての新規リリースがあり大手ボールメーカーモルテンブランドのドッジビーがOEM生産により3月より販売が開始された。

●認定大会制度が確立

協会の重要施策となる認定大会は08年に5件からスタート、09年の28件、そして2010年に38件の申請となった。

翌2011年には63件の申請とさらに大きく飛躍するのだが認定大会の事務的オペレーションなど基礎的な確立がなされた時期である。



●2011年、12月主催大会をスタート

荒川区において初の主催大会を実施。また同日、同場所で指導・審判員資格講習会を実施するなど、運営面での許容量やスタッフの質と量のチェックといった多岐に亘る自己能力の確認など、あらゆる意味でのトライアルをおこなったことは後々の大きな財産となった。

< 2012年（平成24年） >

●DBJA主催 ディスクドッジ大会のシリーズ開催

認定大会による各主催者様の意見を聞く機会が増える中で他地域との交流を望む声が日に日に大きくなってきており、それらのご要望に応えることの必要性和2連続での国体種目に決定したことから統一ルールの啓蒙と普及という観点でDBJAが主催する「中域大会」を2012年よりスタート。

中域大会とは、区市町村の枠は超え、移動負担を感じない程度のエリアでの集いを想定した大会として、東京国体準備の側面から開催エリアを都内中心に開催地元行政との共同でシリーズ的に国体本番

（2013年秋）までに4回開催。参加者は常に増加傾向で推移するなど成功と言える大会となった。

また、東京国体のリハーサル側面も持たせ、開催地関係者を中心とした審判団を積極的に採用するなど、あらゆる意味での検証を重ねる場として有効に機能した。今後もこのコンセプトを踏襲し、東京以外の地域へ広げていくことで、地域普及の施策として確立させていきたいと考えている。



●東北復興支援大会

前年に起きた大震災を支援する目的であらゆる企業・団体が支援活動を行う中、縁のある企業からのオファーで東北3県（福島／宮城／岩手）を会場にドッジビー大会の開催と大会前日に現地関係者を集めて指導・審判員講習会をおこなう講習・大会キャラバンを2ラウンド、夏休みの時期に実施。前日講習は地元で根付いていただきたいという思いから、DBJAより逆提案し、採用いただき実施され、中域大会シリーズとともに有意義な施策となった。



< 2013年（平成25年） >

●東京国体デモスポ行事 ドッチビー開催

前年の9月30日、岐阜県多治見市でのドッチビー大会に続き、2大会連続となる国体デモスポ行事、本番の年。

早朝、2020年東京で五輪開催が決定！！日本スポーツ界における重要な日となった9月8日（日）千代田大会、開催！

小学生部門1部門のみ。24チーム367人の選手、観戦保護者約500名スタッフ関係者を含めると約1000名が集う。

4チーム×6リーグによる予選、決勝トーナメント×8チームにより対戦の結果、荒川区のチームが優勝、

上位4チームは荒川区×2チーム、千代田区×2チームとなった。



9月23日（月祝）調布大会開催！！

小学生低学年部門に11チーム、159人、小学生高学年部門に27チーム、375人 選手合計38チーム、534人、選手観戦保護者約800名、スタッフ関係者を含めると約1,500名が集った。

低学年は5／6チームの2リーグによる予選、各リーグ上位2チーム、計4チームの決勝トーナメント

高学年は3チーム×9リーグによる予選、決勝トーナメント×18チームにより、対戦の結果、両部門ともに上位4チームすべてが調布市となった。



< 2013～14年（平成25～26年） >

●国体デモスポ終了後

年齢性別の差を感じさせない、ドッジビーの大きな特長。

また、震災以降、地域コミュニティの重要性が見直されている社会傾向。

さらには統ルールでおこなわれることで、初対面であっても即時スムーズな交流ができる、スポーツの基本。

これらを総合的に考慮して東京国体終了後の協会が定めた方針は、統ルールによっておこなわれることを前提に

提唱する複数の種目を同時に開催することを基本とした「広域大会」を日本各地で開催する。

こととして、2013年末に「広域ドッジビーコンペティション」シリーズをスタートさせた。

第1回は関東大会として2013年12月22日、東京都武蔵野市、武蔵野総合体育館で開催。この大会では同時に東京国体2大会の上位各4チームによる王座決定戦もおこなった。

DBJA主催大会、過去最高の47チーム、645名が集まった。

このシリーズ共通のテーマである「ディスクドッジ」「ゴールドドッジ」「ドッジディスタンス」の複数種目を同時におこなうにあたり、会場が複数に分散した時の難しさを実感。

また、観客も楽しめる付帯イベントや施設を充実させ、誰もが楽しい大会として評価された。



第2回は近畿・中部大会として2014年3月9日、愛知県豊田市、スカイホール豊田で実施。この大会では主催大会として初となる「障がい者部門」が設定された。



第3回は中国・四国大会として2014年5月18日、岡山県岡山市、ももたろうアリーナで県子ども会連合会が共催となり開催された。



WIDE RANGE DODGEBEE COMPETITION

< 2015年（平成27年） >

●広域ドッジビーコンペティションの継続

前年2014年度から継続して広域大会を中心軸に据え、2015年は3月に東海道大会（静岡県浜松市）10月に北関東大会（栃木県小山市）を開催。東海道大会は東京と愛知の2大拠点から多くのチームが集まり、双方のプレースタイルの違いを実感する機会として評価されるとともに、障がい者部門が実施され、開催地関係者より高い評価を得ることとなった。北関東大会も地元選手が中心とはいえ、主催大会では初となる中学生部門の開催が実現。新たな部門が成立するという目に見える形での進化が出始めた。



また、この年は大会だけでなく組織や計画、さらに用具といった面でも大きな変革が実現した年となる。

●組織面では協会初となる正式な傘下市区町村協会として、千代田区ドッジビー協会（DBAC/DodgeBee Association of Chiyoda）が設立された。



●協会4か年計画の策定に着手

DBJAは2008年に設立、設立からの4年間（2008～11年）は草の根活動を中心に、次の4年間（2012～15年）で主催大会を開始。地域間交流の促進を目指してきたが、3期目となる4年間（2016～19年）の目標設定が必要であり2015年、夏、全体会議において具体的目標として①2019年の全国大会の開催を掲げることを決定。それに伴い具体目標から逆算した整備業務として②法人格の取得 ③競技用具の改善 ④ルールの改定 ⑤資格制度の充実を図るべく、具体的に着手することを同時に決定。夏の全体会議以降、2016年度4か年3期目に向けた準備を開始した。

●2015年12月、初の競技用公式ディスク

「ミカサモデル」を発表。

基本的にはメーカーの業務範疇ではあることだが、初の試みとなる形状の変化、重量の均一化、縫製強化など改良点満載のNEWモデルがデビュー。これ以降、DBJA主催大会においては、全てこのディスクを使用して競技をおこなうことを決定し、ディスクのリリースと同時に発表した。



< 2016年（平成28年） >

●新しいスタイルの主催行事



2016年1月、初心者層に向けたエントリーイベントとして、講習と大会をセットでおこなう「ドッジビーフェスタ」を実施。

久しぶりとなる新シリーズの立ち上げであったが、過去の中域および広域シリーズ大会での運営ノウハウが生きた形で成功を収めることができた。



またこの年、今まで広域大会として、また小規模スポット的な開催となっていたゴールドドッジ大会を年内に3回、実施会場も固定してのシリーズ開催が実現！！これによりゴールドドッジの固定ファン層が見え始め、DBJAにとって明確にディスクドッジに次ぐ「第2の種目」として確立されたと言えるだろう。

●一般社団法人化と4か年計画スタート

2016年3月22日、一般社団法人日本ドッジビー協会を設立登記。また、4か年3期目の計画案を年度スタートの4月1日にホームページ上で発表。



●キリンビバレッジ社との支援型ドリンク自動販売機、導入開始。

広報強化と収入増加の両側面を持つ新たな施策としてDBJAオリジナルデザイン自動販売機の設置の契約を締結。第1号機は東京都府中市内に設置。

●4番目の公認種目リリースと8年ぶりのルール改定

小学生を中心とした「ディスクドッジ」小学生高学年以上を想定した「ゴールドドッジ」に加え、全年齢対応の「ドッジディスタンス」の既存3種目の改定ルールを9月に発表。同時に4番目の公認種目として「ディスゲッタードッジ」の公式ルールをリリース。これはDBJAが今後、高齢者や障がい者の領域に本格進出することを表明する意味で重要な種目としている。



< 2017～18年（平成29～30年） >

● t o t o / スポーツ振興くじの助成を受けて広報関係の活動が充実。

一般社団法人となったことで2017年度、スポーツ振興くじの助成を受けて広報ツールとしてドッチビーガイドブック、ドッチビープロモーションDVD、指導者向けツールとしてディスクドッチ指導者養成テキスト、ディスクドッチ審判用DVDを作成。

引き続き、2018年度はゴールドドッチ指導者養成テキスト、障がい者向けディスク講師の養成テキスト、主催大会の動画配信サイトの作成を実施中！！



●競技用公式ディスク「ミカサモデル」が3サイズの展開に。

DBJA監修の元、2018年1月250と230サイズの公式ディスクがリリースされ、2015年12月の270サイズのリリース以来、丸2年を経て3サイズのバリエーションが完成。

●支援型ドリンク自動販売機、2017年6月に福井県の体育館に4台目の設置が決定。



●【障がい者プロジェクト】

2019年2月、協会の重要課題としたプロジェクトの成果として障がいを持つ方とご家族や日頃から周辺にいつもいる方たちが一緒に遊び、体を動かす機会として「Unified Flyingdisc Session」を初開催！大盛況にて今後、シリーズ化を。

